

## 玄宗朝における『金剛經』信仰と延命祈願

高橋 佳典

### 一 問題の所在

種々の般若經典の中でも、中國において最も廣く行われたのは『金剛經』である。『金剛經』は、五祖弘忍（六〇一—七四）が、それまで禪家が依據してきた『楞伽經』に代わってこの經を重視してから、六祖慧能（六三八—七一四）以降、禪宗の展開と共に、その信仰も高まっていたのである。しかし、『金剛經』信仰が中國社會、庶民の間に大いに浸透していったのは、『金剛經』が禪宗において重んぜられたことのみによるのではなく、この經が様々な現世利益、なかでも特に延命の利益と結び付いていったことによるものと考えられている。

このことは、『金剛經』が『續命經』とも呼ばれていたこ

とからも窺える。<sup>(2)</sup>『太平廣記』卷一一一・報應十一には、「廣異記に出ず」<sup>(3)</sup>として以下のような説話が収められている。

張という男が天寶年間（七四二—五）に御史判官となり、使命を奉じて淮南に向出した。淮河を渡ろうという時に、黄色い上着を着た男が急用があると叫んでやって来たので、張は舟を止めて彼を同船させ、食事の残りを與えて、食べさせてやった。その男は心から感謝し、向こう岸に着くと、張と別れて去っていった。しかし、ほどなくして張が次の宿場まで来てみると、先の男が旅籠屋の門口に立っている。張がその男と話をしてみると、彼が言うには、「手前は實は人間ではなく、冥界の役所の命令で貴方様のお命を頂きに参った鬼でございます。本来ならば、貴方様は淮河で溺れ死ぬことになっておりましたが、先程一飯のお恵みをお受けしたことは、

決して忘れません。一飯のご恩を蒙ったのですから、一日だけ猶豫致しましょう」とのことであつた。更に、その男、つまり鬼は、「もし、一日のうち、『續命經』を一千遍誦し終えることが出来れば、壽命を伸ばせるに違いないのですが」と付言してから出て行つたが、門のところまで行くと、また引き返して来て、「貴方様は『續命經』というお經をご存じですか」と張に尋ねた。しかし、張は『續命經』と言う經典を全く知らなかつた。すると、鬼が「つまりこの世で言う『金剛經』のことですよ」と教えてくれた。この後、張は鬼の忠告に従つて、旅籠屋中の人や近隣の人々を呼び集めて經文を誦えさせ、十年の延壽を得た、と言ふ内容である。

八世紀後半には、中國社會において、『金剛經』が延命利益のある經典として信ぜられていたことが知られよう<sup>(4)</sup>。

ところが、『金剛經』の經文中には延命利益については勿論のこと、他の何らの現世利益についても、直接説かれてゐる箇所は見當たらない。では、唐代中葉において、何故、如何にして『金剛經』が延命祈願の經典として信仰されるに至つたのであろうか。

羅什譯『金剛般若波羅蜜經』中には、以下のような箇所が見える。

玄宗朝における『金剛經』信仰と延命祈願(高橋)

若復有人、於此經中、乃至、受持四句偈等、爲他人説、其福甚多。(若し復た人有りて、此の經中に於いて、乃至、四句の偈等を受持し、他人の爲に説かんに、其の福甚だ多し。)

(大正藏八、七五〇a)

能於此經受持讀誦、則爲如來以佛智慧悉知是人、悉見是人、皆得成就無量無邊功德。(能く此の經に於いて受持し讀誦せんに、則ち爲に如來は佛の智慧を以て悉く是の人を知り、悉く是の人を見、皆無量無邊の功德を成就することを得ん。)

(大正藏八、七五〇c)

若有人能受持讀誦廣爲人説、如來悉知是人、悉見是人、皆得成就不可量不可稱無有邊不可思議功德。(若し人有りて能く受持し讀誦して廣く人の爲に説かば、如來は悉く是の人を知り、悉く是の人を見、皆不可量不可稱にして邊有ること無き不可思議の功德を成就することを得ん。)

(大正藏八、七五〇c)

(紙數の關係上、以下必要な箇所を除いて訓読は割愛する。) 從來の研究では、上掲の如く、『金剛經』の讀誦・受持により「無量無邊功德」を得ることが出来ると説く箇所に、『金剛經』と延命利益との結合の根據を求め、「無量無邊功德」が、中國古來の不老長壽への願望と結び付いていったとして<sup>(5)</sup>いる。

確かに、「無量無邊功德」を説く箇所と不老長壽への願望が結合していったということは、十分考えられる。しかし、數多の經典の中でも、延命祈願の經典として、特に『金剛經』が選ばれたことを考え合わせると、『金剛經』と延命利益とを結び付ける、何かもっと強力な動機付け、原因となるべきことがあったのではなからうか。この「何かもっと強力な動機付け、原因」が、小論において考察したい問題である。

## 二 『金剛經』と延命利益との結合を促した諸原因

當時の庶民の關心を引くのに有効であった手段として、繪解き通俗説法、即ち變相圖を用いた説法が考えられよう。張彥遠の『歷代名畫記』に以下のような記述がある。

淨土院。董誥、尹琳、楊垣、楊喬畫。院內次北廊向東塔院內西壁、吳畫金剛變、工人成色損。次南廊、吳畫金剛經變及邨后、并自題。

『歷代名畫記』卷三・記兩京外州觀寺畫壁

引用文中の「吳」とは、玄宗朝に活躍した畫家吳道玄のことであるから、『歷代名畫記』の編まれた九世紀後半に、吳道玄によって描かれた『金剛經』變が存在していたことは、確

かである。また、吳道玄以外の畫家によっても『金剛經』變が描かれたであろうことは、想像に難くない。しかし、『金剛經』は、唐代に至って俄かに念誦されるようになったにも拘らず、圖像には餘り見られず、『金剛經』の變相圖が描かれることもそれ程多くはなかつた。<sup>(6)</sup>これは、『金剛經』の内容が、佛と須菩提との問答による殆ど動きのない展開であるためかとも思われるが、いずれにせよ、『金剛經』變の描かれることが數少なく、經文に延命のことが直接説かれていない以上、『金剛經』と延命利益とを結び付けた要因として、『金剛經』變による説法が不可缺なものであったとは、考えにくい。それでは一體、『金剛經』を延命の利益と結合させた強力な動機付けとは何だったのであらうか。

(1) 「云何梵」、(2) 玄宗朝より始まったとされる聖節、そして(3) 玄宗による『御注金剛經』の開注という三點を、筆者は、『金剛經』と延命利益との結合を促した要因として想定してみた。以下、これら三つの要因について、順次考察してみたい。

(1) 「云何梵」に見る『金剛經』と延命利益との結合  
『梁朝傳大士頌金剛經』(S. 136)<sup>(7)</sup>以降の『金剛經』寫本・刻本、同經注疏類の中には、經文の前に「金剛經啓請」と稱

される新たな要素の附加されたものが、多く見られる。「金剛經啓請」は、「淨口業眞言」などの數種の眞言、發願文、

(後略)

(大正藏八五、一a～b)

奉請八金剛、奉請四菩薩<sup>(8)</sup>などから成り、「金剛經」讀誦の前にこれらを誦えるよう指示してある。各々の寫本・刻本、注釋書により構成要素に違いが見られる。「金剛經啓請」の附加は、八世紀後半から九世紀中葉にかけて進行したとされる。一例として、『梁朝傳大士頌金剛經』に見える「金剛經啓請」を掲げる。

若有人持誦金剛般若波羅蜜經、先須至心念淨口業眞言、然後啓請八金剛四菩薩名號、所在之處常當擁護。

淨口業眞言

唵修利修利摩訶修利修利莎娑訶

虛空菩薩普供養眞言

唵譏譏曩三婆縛襪日羅斛

云何梵、云何得長壽 金剛不壞身 復以何因緣 得大堅固力 云何於此經 究竟到彼岸 願佛開微蜜 廣爲衆生

說

發願文

(中略)

奉請八金剛

玄宗朝における『金剛經』信仰と延命祈願(高橋)

ここで特に注意したい要素が、「云何梵」である。「云何梵」は「云何唄」とも稱せられ、講經儀式において唱えられた最も普遍的な梵唄である。「云何梵」は、先に示した如く、

云何得長壽 金剛不壞身 復以何因緣 得大堅固力 云何於此經 究竟到彼岸 願佛開微蜜 廣爲衆生說

という八句から成り、法照(生没年不詳、八世紀)の『淨土五會念佛略法事儀讚』にも引かれている<sup>(10)</sup>。また、『法苑珠林』卷

三六・唄讚篇讚歎部には、

吾師天中兩行偈〔出普曜經〕 云何得長壽兩行偈〔出涅槃經〕 如來色身兩行偈〔出勝鬘經〕 處世界如虛空兩行

偈〔出超日明經云〕

(大正藏五三、五七五c)

(一)〔内は割注であることを示す。以下も同じ〕

とあり、唐代通用の四偈の一つに「云何梵」を掲げ、出典を『涅槃經』であるととしている。

この「云何梵」は、講經儀式では、大衆の入堂・列座に續いて講師と都講が高座に登ると、下座の一僧によって唱えられるのである。この次第は、『入唐求法巡禮行記』の記述か

ら知ることが出来る。同書卷一・天臺大士忌日設齋、及び赤山院講經儀式の條には、

廿四日、堂頭設齋。衆僧六十有餘。幻羣法師作齋歎文食儀式也。衆僧共入堂裏、次第列座。有人行水。施主僧等、於堂前立。衆僧之中、有一僧打槌。更有一僧作梵。梵頌云、云何於此經。究竟到彼岸。願佛開微蜜。廣爲衆生說。音韻絕妙。作梵之間、有人分經。梵音之後、衆生念經、各二枚許、卽打槌、轉經畢。

開成三年(八三八)十一月廿四日「天臺大士忌日設齋」赤山院講經儀式。辰時、打講經鐘。打驚衆鐘訖。良久之會、大衆上堂、方定衆鐘、講師上堂。登高座間、大衆同音稱嘆佛名。音曲一依新羅、不似唐音。講師登座訖、稱佛名便停。時有下座一僧作梵、一據唐風。卽云何於此經等一行偈矣。至願佛開微密句、大衆同音唱云、戒香定香解脫香等頌。梵唄訖、講師唱經題目、便開題分別三門。開成四年(八三九)十一月「赤山院講經儀式」と記されており(傍線は筆者)、講經義式において「云何梵」の唱えられる様子が看取されよう。

さて、「云何梵」に關して注目すべきは、「云何得長壽 金剛不壞身」(云何が長壽、金剛不壞の身を得ん)という冒頭の二

句、及びこの「云何梵」を含む「金剛經啓請」が附された形で『金剛經』が行われていたことである。なぜならば、「云何得長壽 金剛不壞身」の二句が、『金剛經』と延命の利益とを結び付ける要因の一つであったと思われるからである。

五代の永明延壽(九〇四—九七五)に、『金剛證驗賦』<sup>(12)</sup>と稱する著作があるが、この書の冒頭近くに、次のように記されている。

能令促命現世而壽續金剛。〔梵文頌言、云何得長壽、金剛不壞身。持此經人多增壽算、向下當說。〕

『金剛證驗賦』(『永樂大典』卷七五四三・剛部)「梵文頌」という表現が何を意味するのか、問題ではあるが、「云何得長壽 金剛不壞身」が「云何梵」の冒頭の二句であることは明らかである。つまり、この記述から、永明延壽が、「云何梵」を『金剛經』受持による延命利益の根據としていることがわかる。更には、『金剛經』を稱贊する賦に、本來同經典とは直接関係のない管の「云何梵」が引かれているということは、永明延壽が「金剛經啓請」の附された『金剛經』の寫本、あるいは刻本を見ていた可能性が高い。同じく五代の義楚の著した『釋氏六帖』<sup>(13)</sup>卷十六・幽冥鬼神部に

金剛。名曰晝至。(中略)有八金剛。「能斷金剛經云、奉請八金剛。清除災、赤昇火、定除災、辟毒、紫賢、大身、黃隨求、白淨水。杵寶之用也。」

という記述が見えるが、これは「金剛經啓請」の附加された『金剛經』の寫本、乃至は刻本を前提としなければあり得ない表現であることは、明らかである。つまり、『釋氏六帖』のこの記述も、少なくとも五代には、既に「金剛經啓請」と一體化した『金剛經』が一般的に流布していたことを示唆しているのである。

以上、考察してきたところを總括してみると、八世紀後半から九世紀中葉にかけて「金剛經啓請」の『金剛經』への附加が進展してゆき、この結果、講經儀式においてのみではなく、普通に『金剛經』を讀誦する際にも、「金剛經啓請」の附された寫本・刻本が行われるようになったと思われる。そして、「金剛經啓請」の一要素である「云何梵」特にその冒頭の「云何得長壽 金剛不壞身」という二句が、『金剛經』と延命利益との結合を促したのではないかと考えられるのである。

- (2) 聖節(誕聖節)に見る『金剛經』と延命利益との結合

玄宗朝における『金剛經』信仰と延命祈願(高橋)

聖節は、玄宗朝より始まったとされる皇帝の誕生の祝日のことであり、誕節、あるいは誕聖節とも稱される。この日には、宮中において、今上皇帝の万壽を祝する盛大な儀式が営まれた。<sup>(14)</sup>『舊唐書』卷八・玄宗本紀上・開元十七年(七二九)八月の條には、聖節の起源に關する、以下のような記事がある。

八月癸亥、上似降誕日、讌百僚于花萼樓下。百僚表請以每年八月五日爲千秋節。王公已下獻鏡及承露囊、天下諸州咸令讌樂、休暇三日、仍編爲令。從之。

また、『佛祖統紀』卷四〇には、翌年の開元十八年(七三〇)のこととして、

詔天下寺觀、建天長節祝壽道場。(天下の寺觀に詔し、天長節祝壽道場を建てしむ。)

(大正藏四九、三七四c)

という記事が載録されている。千秋節という節名が天長節と改められているが、<sup>(15)</sup>ともかく天下の寺觀に詔勅が下り、各々の佛寺及び道觀において玄宗の萬壽を祝する天長節祝壽道場が設けられ、聖節の儀式的の營まれたことが判る。更に、同じく『佛祖統紀』卷四〇・開元二十七年(七三九)の條には、

二十七年、勅天下僧道、遇國忌就龍興寺行道散齋、千秋節祝壽就開元寺。

(大正藏四九、三七五a)

とあり、また、『唐會要』卷五〇・雜記にも開元二十七年のこととして、

二十七年五月二十八日勅、祠部奏、諸州縣行道散齋觀寺、准式、以同華等八十一州郭下僧尼道士女冠等、國忌日各就龍興寺觀行道散齋。復請改就開元觀寺。勅旨、京兆河南府、宜似舊觀寺爲定。唯千秋節及三元行道設齋、宜就開元觀寺。

という記事が載録されている。つまり、以上の史料から、開元十八年以來、聖節の法會は宮中においてのみではなく、中國各地の佛寺においても舉行され、開元二十七年以降は、全國の開元寺<sup>(16)</sup>において執り行われるようになり、正に國を擧げ<sup>(17)</sup>ての行事であったことが知られる。しかし、祝壽道場が設置され、齋を設けて行道が行われたこと以外、具體的に如何なる儀式が營まれたのか判然としない。『唐六典』卷四・尚書祠部の條にも、

凡道觀三元日、千秋節日、凡修金錄、明眞等齋、及僧寺別勅設齋、應行道官給料。

とあるが、やはり、設齋行道を行ったということのみしか知らしめては<sup>(18)</sup>くれない。

しかし、『佛祖統紀』卷四一・德宗の貞元十一年(七九五)

四月及び翌十二年(七九六)四月の條に、それぞれ、

四月誕節詔澄觀法師、入內殿講經。以妙法清涼帝心、號清涼法師教授和上。

(大正藏四九、三八〇a)

四月誕節御麟德殿、勅給事中徐岱等、與沙門覃延道士葛參成講論三教。

(大正藏四九、三八〇a)

という記事が見える。また、『入唐求法巡禮行記』卷三・武宗の會昌元年(八四一)六月及び同書卷四の會昌四年(八四四)三月の條に、それぞれ、

六月十一日、今上降誕日、於內裏設齋。兩街供養大德及道士集談經、四對論議。

會昌元年(八四一)六月

國風、每年至皇帝降誕日、請兩街供奉講論大德及道士、於內裏設齋行香、請僧談經、對釋教道教對論義。

會昌四年(八四四)三月

とある。玄宗朝における聖節の開始以降、唐朝歴代の皇帝によって聖節の法會が營まれて来たということのみでなく、設齋行道に加えて、行香が伴うようになったり、更には、佛僧

を内道場に招いて經を講じさせたり、あるいは、道士をも招いて佛道二教、乃至は儒佛道三教の間で論義をさせたり、という發展した形を看て取るのが出來よう。

聖節の儀式が、一體如何なる過程を経て、このような大いに發展した形式となつていったのかということについては、精細に検討する必要がある。殊に、武宗朝に關しては、廢佛の問題も關わつて來るが、いづれにしろ、聖節の開始以降、それはかなり急速に壯大化し、開元年間の末頃、即ち八世紀中葉には、各州の開元寺を中心に全國規模の法會に發展していったことだけは確かであろう。このことを裏付けてくれる證據の一つとして、段成式の『酉陽雜俎』續集卷五・寺塔記上・平康坊菩提寺の條に、次のような記事がある。

寺主元竟、多識釋門故事。李右座每至生日、常轉請此寺僧、就宅設齋。

李右座とは、宰相の職にまで登り詰めた、玄宗の寵臣李林甫（？—七五二）のことであるが、その李林甫が、自分の誕生日が來るたびに、菩提寺の僧に頼んで邸宅に來てもらい、齋會を設けたということであろう。この記事から、聖節の法會が、各々の生誕日を祝する私的な行事として、貴族たちの間にも流行していった様子が窺われる。玄宗の始めた聖節の中

玄宗朝における『金剛經』信仰と延命祈願（高橋）

國社會への影響力は、小さからぬものであったと思われる。さて、以上聖節の起源と發展を大まかに概観して來たのであるが、聖節に關して注目したいのが、この儀式的舉行の際に、「金剛無量壽道場」という道場が築かれ、今上皇帝の聖壽無窮を祝延するために「金剛無量壽佛」という佛名が稱えられたことである。

『勅修百丈清規』卷一・祝釐章・聖節の項に、  
欽遇聖節、必先啓建金剛無量壽道場。一月日僧行不給暇示敬也。啓建之先一日、堂司備榜、張于三門之右及上殿。經單〔式見後〕俱用黃紙書之。

（大正藏四八、一一一三a）

維那舉楞嚴呪、回向云、〔諷誦秘章。所萃洪因、端爲祝延今上皇帝聖壽萬安。金剛無量壽佛云云。〕衆散。

（大正藏四八、一一一三b）

とある。「金剛無量壽道場」及び「金剛無量壽佛」という二語は、ここに引用した箇所以外にも祝釐章・聖節の項に散見するが、ここで看過してはならないのは、「金剛」と「無量壽」という兩語が連結して用いられていることである。勿論、「金剛」(vajra) という語には、元來「堅固」の義があるが、「金剛」と「無量壽」という兩語が連結して使用された



ことよつて、「金剛」という語と延命との、引いては『金剛經』と延命利益との結合が、より一層助長されたのではないかと思われるからである。<sup>(20)</sup>

前掲の引用文中に見える「經單」とは、聖節において讀誦する經典名を掲げたものであるが、祝釐章・聖節の項の末尾に「經單式」として次の如き書式が附されている。

經單式

今具經文品目于后

大方廣佛華嚴經

大佛頂萬行首楞嚴經

大乘妙法蓮華經

大乘金光明經

大方廣圓覺脩多羅了義經

大乘金剛般若波羅密經

大仁王護國經

右具如前

(大正藏四八、一一一四a)

『大乘金剛般若波羅密經』、即ち『金剛經』の名が擧がっていることに注意したい。つまり、『勅修百丈清規』に據れば、聖節の儀式の際に『法華經』や『仁王護國經』などと共に、

今上皇帝の萬壽を祝して『金剛經』が誦えられたのである。ここにも『金剛經』と延命利益との結合を促した要因の一つを見て取ることが出来るように思われるが、聖節の儀式における『金剛經』の讀誦については、玄宗による『御注金剛經』の開注の問題と併せて、次節で詳しく検討してみたい。

以上、『勅修百丈清規』卷一・祝釐章・聖節の項に見える「金剛無量壽道場」及び「金剛無量壽佛」という兩語を手掛かりにして、聖節に見る『金剛經』と延命利益との結合について考察して來たのであるが、言うまでもなく、『勅修百丈清規』<sup>(21)</sup>は唐代を遙か下つた元代の至元四年(一三三八)に編まれたものである。従つて、『勅修百丈清規』に記述されている形式の聖節の儀式が、唐代においてもその儘の形で行われていたのかという点、確かに、疑義を抱かざるを得ないであろう。「金剛無量壽道場」と「金剛無量壽佛」の兩語は、『勅修百丈清規』以外にも、『感淳清規』(續藏經二・一七・一、咸淳十年、西曆一二七四年成立)卷下・六・聖節啓建滿散の項、『至大清規』(續藏經二・一七・一、至大四年、西曆一三二一年成立)卷之一・天・聖節陞座諷經の項にも見えるが、これらも唐代よりずっと後世に編纂されたものである。

しかし、『勅修百丈清規』卷一の聖節の項に、

聖節啓散、古規所載。(聖節の啓と散とは、古規の載する所なり。)

(大正藏四八、一一一三)

という記述が見える。この「古規」なる語を如何に解するか  
が問題である。つまり、「古規」を百丈懷海(七四九—八一四)  
の制定した所謂「百丈古清規」と解するか、或いは、固有名  
詞としてではなく、單に「古い清規」と解するか、というこ  
とである。もし、この「古規」が「百丈古清規」を意味する  
のであるならば、八世紀後半には、既に『勅修百丈清規』に  
見られるような形式の聖節の儀式が營まれていたことにな  
るが、そうではなく、逆に「百丈古清規」を指すのではない  
ならば、『勅修百丈清規』の記述を基にして、唐代に行われ  
ていた聖節の儀式次第を復元することは、極めて困難とな  
る<sup>(23)</sup>。

「百丈古清規」の原本が失われてしまっている以上、明確  
な判断を下すことは不可能であるが、「百丈古清規」中に、  
『勅修百丈清規』において見られるような、精緻な聖節の儀  
式次第が記載されていたであろうとは、考えにくい。まし  
て、小論において問題としている玄宗朝という時代、即ち、  
八世紀は禪宗の形成期に当たり、「百丈古清規」を制定した

玄宗朝における『金剛經』信仰と延命祈願(高橋)

百丈懷海が、帝權や貴族との結び付きを拒否していたことを  
考え併せると、「百丈古清規」には聖節の項が設けられては  
いなかったであろうと推定するのが、むしろ當然である。し  
かし、「百丈古清規」中に聖節に關する記述がなく、従って、  
八世紀には禪林において聖節の儀式の營まれることが殆どな  
かったとしても、開元寺を中心とする一般寺院では、これま  
で見て来た如く、盛大な聖節の法會が舉行されていたのであ  
り、その法會の際には、先に引用した『佛祖統記』卷四〇・  
開元十八年の條の「詔天下寺觀、建天長節祝壽道場」という  
記述からも知られるように、祝壽の爲の道場が築かれたので  
あるから、その道場が「金剛無量壽道場」と稱され、皇帝の  
聖壽無窮を祝延する爲に「金剛無量壽佛」という佛名が稱え  
られた可能性は、十分考えられよう。そして、安史の亂以  
降、殊に宋代における大きな社會經濟上の變革の中で、禪林  
は従来の自給自足體制を斷念し、檀信依存體制に移行せざる  
を得なくなり、その結果、他の一般寺院の諸制度・諸要素を  
取り入れてゆき、このような狀況の中で、一般寺院と同様  
に、國土の安穩や皇帝の聖壽を祈念する官寺としての性格を  
有するようになったのであろう<sup>(25)</sup>。かくして、禪林も國家の宗  
教行事を擔わなければならなくなり、『咸淳清規』以降の清

規に聖節の項が正式に設けられるようになったと推察される。

つまり、禪林は、國家の宗教行事を擔わなければならなくなった時、當然の結果として聖節の儀式をも營むようになったのであり、その際、玄宗朝以降、各々の一般寺院で舉行されてきた儀式次第を範として受入し、それが清規にも明示されることになったのであろう。従って、恐らく、唐代における聖節の儀式の骨子は、後世の清規に見えるものとそれ程異なるものではなかったと思われる。

以上考察してきたところを總括すれば、『咸淳清規』以降の清規に見える聖節の儀次第の記述から、玄宗朝に開始された聖節の法會において、「金剛無量壽道場」が築かれ、皇帝の聖壽無窮を祝延する爲に「金剛無量壽佛」という佛名が稱えられたと推察される。そして、「金剛」及び「無量壽」という兩語が連結して用いられたことが、「金剛」という語、引いては『金剛經』と延命利益との結合を促す一因となったのであろう。

(3) 玄宗による『御注金剛經』開注と延命祈願

玄宗による『御注金剛經』<sup>(26)</sup>の開注は、開元二十三年(七三三)或いは二十四年(七三六)のこととされている。『冊府元

龜』卷五一・帝王部・崇釋一、『宋高僧傳』卷一四・玄奘傳、及び『佛祖統紀』卷四〇・開元二十四年の條に、それぞれ、

二十三年九月、親注金剛經。

『冊府元龜』卷五一・帝王部・崇釋一

開元二十四年、帝親注金剛般若經、詔頒天下普令宣講。

『宋高僧傳』卷一四・玄奘傳(大正藏五〇、七九五b)

二十四年、勅頒御註金剛般若經於天下。

『佛祖統紀』卷四〇・開元二十四年(大正藏四九、三七五a)

とある如くであり、<sup>(27)</sup>『御注金剛經』開注の後、詔勅が下って天下の佛寺に頒行され、宣講されたことがわかる。また、朱景玄の『唐朝名畫錄』吳道玄傳には、

上都唐興寺御注金剛經院妙迹爲多。兼自題經文。

という記述が見える。『御注金剛經院』の「御注金剛經」とは玄宗の御注のことであろうから、『御注金剛經』を收藏していた佛院を「御注金剛經院」と號したものと思われる。『御注金剛經』の普及度・浸透度がかなりのものであったことが窺われよう。

玄宗の『御注金剛經』開注の動機は、これ以前に『御注孝經』<sup>(28)</sup>(開元十年、西曆七二二年に完成)及び『御注道德經』<sup>(30)</sup>(開元二十年、西曆七三二年に完成)の開注がそれぞれなされており、

また、玄宗自身による「答張九齡賀御注金剛經批」に、

竟依羣請、以道元元。與夫孝經道經三教無闕。(竟に羣請に依りて、以て元元を道けり。夫の孝經道經と三教闕くる無し。)

『全唐文』卷三七とあることから、三教の勢力バランスを考慮してのことであるとされている。道佛二教を國家の統制下に置き、これを保護育成せんとする企圖のあつた玄宗が、周圍の來請もあつて、自ら『金剛經』に注釋を施したとする解釋である。確かに、『御注金剛經』自序にも「今之此注、則順乎來請」と記されている。従つて、右に述べた如く、從來説かれて來たように解釋するのが、妥當であるかと思われる。

しかし、張九齡が『御注金剛經』の頒行を祝賀したのに應えて、玄宗は「答張九齡賀御注金剛經手詔」において、

僧徒固請、欲以興教。心有所得、輒復疏之。今請頒行、仍慮未愜。

『全唐文』卷三〇

と述べている。この手詔は、玄宗が平生『金剛經』を讀誦していたことを示唆しているのではなからうか。つまり、玄宗が數多の佛典から特に『金剛經』を選んで注釋を施した、玄宗の個人的な動機がある筈だということである。『佛祖統紀』

玄宗朝における『金剛經』信仰と延命祈願(高橋)

卷四〇・開元十八年(七三〇)の條には、次のような記事が收められている。

武功縣丞蘇珪、常誦金剛經、合家五十口皆蔬食。妻崔氏以瘦悴竊食肉、變爲骨體。氣絕斂十日、復蘇言、見閻王、責曰、汝夫是肉身菩薩、何爲盜食肉。賴有誦經之功、延壽二十年。可歸以語諸人。時帝聞之、亦發心持經、從化者甚多。

(大正藏四九、三七四c)

前掲の『金剛證驗賦』にも同一の説話が收められているが(但し、開元三年のこととしている)、記述は『佛祖統紀』よりも詳細であり、玄宗が發心して『金剛經』を受持するようになったとした後に、

得延年益壽。帝親御筆注出經文、散下諸州、令道俗各寫一本。(延年益壽を得たり。帝親しく御筆もて經文に注出し、諸州に散下して、道俗をして各々一本を寫せしむ。)

という後日談をも附加してある。つまり、この説話は、武功縣丞の蘇珪の妻が、『金剛經』讀誦の功德によって延命の利益を得たという話を耳にした玄宗が、發心して『金剛經』を受持するようになったことを伝える話である。この説話によれば、『御注金剛經』の注文自體には、延命利益について言

及している部分は見當たらぬものの、玄宗は『金剛經』を延命利益のある經典として受け入れ、『金剛經』を信仰するようになったということになる。もし、この説話が、脚色が施されているにせよ、ある程度事實に基づくものであるとするならば、『御注金剛經』開注の動機の根底に、玄宗個人の『金剛經』に對する信仰心が存したということにならう。

以上のように見て來ると、前節で掲げた『勅修百丈清規』の經單式にも『金剛經』の經名が擧げられていた如く、玄宗朝の聖節の儀式において『金剛經』が誦えられたであろうことは十分に考えられる。とするならば、玄宗自身が延命利益があるとした『金剛經』が、皇帝の萬壽を祝する聖節の儀式において讀誦されたことが、『金剛經』と延命利益との結合をより一層促したのではないかと思われる。

### 三 補足及び總括

以上の如く、(1)云何梵、(2)玄宗朝から始まったとされる聖節、そして(3)玄宗による『御注金剛經』の開注という三點から、『金剛經』と延命利益との結合について考察して來たが、最後に付言しておかねばならないのは、『金剛經』と延命利益との結合は、玄宗朝以前にも認められるということであ

る。例えば、吉藏(五四九—六二三)の『金剛般若疏』卷一には、

問、誦持般若有何驗益。答、此經流行漢地二百餘年、誦者得益不可稱記。(中略)開善法師誦得延壽七年。

(大正藏三三、九〇c)

とあり、『金剛經』に纏わる靈驗譚の一つとして、開善法師の延命譚を載録している。また、孟獻忠の『金剛般若集驗記』三卷(續藏經二・乙・二二、開元六年、西曆七八一年に成立)に收められている説話を始めとして、『金剛經』に纏わる靈驗譚には、延命の利益を説くものが散見する。しかし、注目すべきは、唐代中葉までに成立した『金剛經』靈驗譚には、觀音靈驗譚との類似性が色濃く認められ、延命利益の他にも、水難・刀杖難・枷鎖難からの救済など、様々な現世利益が説かれていることである。<sup>(35)</sup>觀音靈驗譚との類似を示す特徴的な實例を擧げれば、『北史』及び『太平廣記』に、北魏の盧景裕に関する以下の如き話が、それぞれ收録されている。<sup>(36)</sup>

景裕、字仲孺。(中略)節閔初、除國子博士。(中略)河間邢摩納與景裕從兄仲禮據鄉作逆、逼其同反、以應西魏。

齊神武命都督賀拔仁討平之。(中略)景裕之敗也、繫晉陽

獄。至心誦經、枷鎖自脫。(中略)此經遂行、號曰高王觀世音。

『北史』卷三〇・盧景裕傳

後魏盧景裕、字仲孺。節閔初、爲國子博士。信釋氏、註周易、論語。從兄神禮、據鄉人反叛、逼其同力、以應西魏。繫晉陽獄。至心念金剛經、枷鎖自脫。齋神武作相、特見原有。〔出報應記〕

『太平廣記』卷一〇二・報應一・金剛經

ほぼ同内容の説話であるが、『報應記』においては、經典名が『金剛經』に書き換えられており、『太平廣記』に收められる際にも、そのまま転載されたものと推察し得る。これはほんの一例であるが、つまり、唐代中頃以前に成立したと思われる説話においては、經典名さえ差し替えてしまえば、觀音靈驗譚であるのか、或いは『金剛經』靈驗譚であるのか、全く識別出来ない程に酷似した説話が見られるのである。

しかし、唐代中葉以降になると、延命利益を説く靈驗譚の割合が増加してゆく傾向にあり、更に、小論冒頭でも指摘したように、『金剛經』が『續命經』の別名をもって呼ばれるようになるのも、唐代中葉以降のことなのである。<sup>(38)</sup>

右に述べた現象について、以下のように解釋することは可

玄宗朝における『金剛經』信仰と延命祈願(高橋)

能であると思われる。即ち、『金剛經』が、既に中國社會に浸透していた觀音信仰という受け皿の中に、次第に入り込んでゆき、様々な現世利益を叶える經典として信仰されるようになる。やがて、(1)云何梵、(2)玄宗朝から始まったとされる聖節、(3)玄宗による『御注金剛經』の開注という三つの動機付けにより、『金剛經』と延命利益との結び付きが強められたのであろう。つまり、(1)云何梵、(2)玄宗朝から始まったとされる聖節、(3)玄宗による『御注金剛經』の開注の三點が、『金剛經』と延命利益とを結合させた根本的原因ではないにしろ、少なくともその二者の結合をより強く促したのであり、正に玄宗朝の頃に、『金剛經』が延命祈願の經典として信仰される轉機があったことは、十分考え得るのである。

#### 註

- (1) 山崎宏「六朝隋唐時代の報應信仰」『史林』四〇一六、一九五七年)、滋野井恬「唐代庶民層における佛教信仰」(同著『唐代佛教史論』p.p. 238-256 平樂寺書店、一九七三年)、拙稿「唐代における『金剛經』信仰に関する一考察——『金剛經鳩異』を中心として」(『論叢・アジアの文化と思想』三、一九九四年) 参照。

- (2) 山崎宏・前掲論文、吳光燾『金剛般若經集驗記』研究」

東洋の思想と宗教 第十六號

(金知見・秦印幻編『新羅佛教研究』pp.471-503 山喜房佛書林、一九七三年)、拙稿・前掲論文。

- (3) 紙幅の關係上、ここでの原文引用は割愛した。『廣異記』は、他の唐代小説と同じく、完本は傳わっていない。しかし、宋初に編纂された『太平廣記』にその佚文の多くが載録されているので、小論では『太平廣記』に據った。『廣異記』は、唐宋のいずれの目錄にも著録されていないが、この書には元來、中唐の詩人顧況による「戴氏廣異記序」(『文苑英華』卷七七七所收)が附されていたらしく、この序文から、『廣異記』及び撰者戴孚についての外郭を窺うことが出来る。程毅中氏は、戴孚の卒年は貞元十年(七九四)を下らないと考察されている。いずれにせよ、戴孚が八世紀後半の人物であることは確實であろう。『廣異記』及び戴孚の詳細については、程毅中「唐代小説瑣記」(『文學遺產』一九八〇年第二期)、同著『唐代小説史話』(文化藝術出版社、一九九〇年)、方詩銘輯校『廣異記』・輯校説明(中華書局、一九九二年)等参照。
- (4) 説話冒頭に「唐天寶中」とあるが、この紀年を信ずれば、天寶年間(七四二―七五六)には、既に『金剛經』が延命利益のある經典として信仰され、『續命經』という別名をもつて稱されていたことになる。或いはこの紀年を疑ったとしても、『廣異記』の撰者戴孚は、註(3)で指摘した如く、八世紀後半の人物であるから、同世紀末頃には延命祈願の經典

としての『金剛經』―『續命經』信仰が、中國社會に浸透していたと考えてよからう。

(5) 山崎宏・前掲論文、滋野井恬・前掲論文。

- (6) 山崎宏・前掲論文、平野顯照「刻經と寫經―金剛般若波羅蜜多經を中心として―」(『大谷大學所藏燉煌古寫經』pp.35-46 一九七二年)参照。山崎氏は、「報應信仰上、隋唐時代に至って急に念誦されながら、圖像に餘りみられなかった金剛經」として、『金剛經』變がそれ程多くは存在しなかったという見解を示されている。これに對して、平野氏は、「燉煌莫高窟の壁面に金剛經變がかなり描かれていたなごりを、謝稚柳が「燉煌藝術叙録」のなかに記録している。かように、變文や繪畫を應用して金剛經が普及擴大の勢力をおしすすめていったのである」と述べて、『金剛經』變は決して少なくはなかったと考察されている。謝稚柳氏の『燉煌藝術叙録』(上海出版公司、一九五五年)は、一九四二―四三年に掛けて、謝氏自らが行った實地調査の記録を整理・編集したものであるが、同著に據れば、莫高窟の第三六窟北壁、第一六七窟南壁、第一六九窟南壁の三箇所に『金剛經』變の描かれていることが確認出来る。従つて、調査當時、既に剝落していて確認不可能であったものを考慮に入れたとしても、『金剛經』變の存在はそれ程多いとは言えないであろう。因つて、筆者は、山崎氏と同様に、『金剛經』變の描かれたことは餘りなかったと考へたい。

(7) 『梁朝傳大士頌金剛經』には、年號も記者も明示されていないので、その成立に關しては判然とはわからない。小林雨峯氏は、初唐頃、即ち八世紀初頭には既に成立していたと論攷されている。また、矢吹慶輝氏は、中唐頃、即ち八世紀後半〜九世紀前半に流行していたと考察されている。『梁朝傳大士頌金剛經』については、小林雨峯「燉煌發掘の傳大士頌金剛般若經に就て」(『密教』四一、一九一四年)、中村不折「傳大士頌金剛經及び頌文に就て」(『密教』四一、一九一四年)、矢吹慶輝「鳴沙餘韻・解説篇」(岩波書店、一九三〇年)第一部pp.79-81「梁朝傳大士頌金剛經」の項、松崎清浩「傳大士と『金剛經』」(『宗學研究』二四、一九八二年)等参照。

(8) 八金剛の名號は、青除災金剛・辟毒金剛・黃隨求金剛・白淨水金剛・赤聲金剛・定除災金剛・紫賢金剛・大神金剛であり、四菩薩の名號は、金剛竊菩薩・金剛索菩薩・金剛愛菩薩・金剛語菩薩である。ペリオ本 P.2265 或いはスタイン本 S.5246 の如く、八金剛や四菩薩の名號のみでなく、その畫像の描かれた寫本も存在する。また、明の圓杲の『金剛經音釋直解』一卷(續藏經一・三九・二)には、八金剛及び四菩薩の來歴について解説してある。八金剛・四菩薩も考察を加えるべき問題であるが、ここでは、「金剛經啓請」中にそれぞれの名號が列記されていることを指摘するに止める。平井有慶「金剛般若經」(『講座燉煌7・燉煌と中國佛教』pp.17-

玄宗朝における『金剛經』信仰と延命祈願(高橋)

34 大東出版社、一九八四年) 参照。

(9) 平井有慶・前掲論文参照。平井氏は、「金剛經啓請」の附加について、「これはもうあきらかにある種の儀禮を營む次第であつて、こうしてみると、時代を経るとともに儀禮様式が附加されていったよう」と考察し、『金剛經』が流布するのに従つて、八世紀後半から九世紀中葉にかけて、附加が進行していったとされている。

(10) 大正藏四七、四七五b-c。

(11) 講經儀式の式次第、「云何梵」及び講經儀式において「云何梵」が如何にして唱えられたかについては、福井文雅「講經儀式と論義」(仁戸田六三郎編『日本人の宗教意識の本質』pp.247-284 教文館、一九七三年)に詳しい。

(12) 『釋門正統』八卷(續藏經二・乙・三・五)には、「著五賦曰神棲安養、法華靈瑞、華嚴感通、觀音應現、金剛證驗」とあり、延壽の著した五賦の一つとして『金剛證驗賦』が擧げられている。また、『覺賢禪師自行錄』一卷(續藏經二・一六・一)の末尾に、六十一本、一百九十七卷に及ぶ延壽の著作が列記されているが、ここにも「金剛證驗賦一道」という記述が見える。五賦の中、現存するものは『神栖安養賦』及び『金剛證驗賦』であり、それぞれ『樂邦文類』卷五(大正藏四七、二一四c~二一五c)と『永樂大典』卷七五四三・剛部とに收められている。尙、延壽及びその著作については、畑中淨園「吳越の佛教——特に天臺德韻とその嗣永明延



壽について——」〔大谷大學研究年報〕七 pp.305-363 一九五四年) 参照。

- (13) 『義楚六帖』とも稱されるこの書は、義楚の自序に據れば、後周の世宗顯徳元年(九五四)五月の成立である。民國三十三年(一九四四)十一月に、上海の普慧大藏經刊行會が、寛文九年(一六六九)の和刻本に基づいて『釋氏六帖』を鉛印復刊している。(冒頭の割注に「原本、日本寛文九年飯田氏忠兵衛刻。校本、無」とある。)また、寛文九年版の影印復刊本が、一九七九年八月に朋友書店から出版された。一九九〇年十月には、普慧大藏經の縮印版が浙江古籍出版社から出版されている。小論では、朋友書店本及び浙江古籍出版社本に據った。『釋氏六帖』については、牧田諦亮『義楚六帖について』(朋友書店本 pp.1-6)、山路茅範『義楚六帖』引用典籍考——卷九から卷十二を中心として——(『佛教史學研究』三四—一、一九九一年) 参照。

- (14) 聖節については、『大宋僧史略』卷中・生日道場及び卷下・誕辰談論(大正藏五四、二四七c、二四八a、b)、『冊府元龜』卷二・帝王部・誕聖の項、『日知錄』卷一四・聖節の項等参照。また、大谷光照氏は、『唐代佛教の儀禮——特に法會に就て』(『史學雜誌』四六一・十一、一九三五年)において、恒例の法會の一つとして聖節について考察されている。

(15) 『冊府元龜』卷二・帝王部・誕聖の項に「天寶七載七月、

文武百官、刑部尚書兼京兆尹蕭昭等及宗子、咸上表請、改千秋節爲天長節。從之」とあり、また、『舊唐書』卷九・玄宗本紀下・天寶七載の條も「秋八月己亥朔、改千秋節爲天長節」としているから、天長節と稱されるようになったのは、天寶七載(七四八)以後であると考えられ、従つて『佛祖統紀』卷四〇が「天長節」としているのは、「千秋節」の誤りかと思われる。

- (16) 開元寺の創設は開元二十六年(七三八)である。『唐會要』卷五〇・雜記に、「二十六年六月一日、勅每州各以郭下定形勝觀寺、改以開元爲額」とある。尙、龍興寺及び開元寺については、塚本善隆「國分寺と隋唐の佛教政策並びに官寺」(『塚本善隆著作集』第六卷 pp.1-6) 大東出版社、一九七四年) に詳し。

(17) 『唐六典』三〇卷は、開元二十七年(七三九)に完成。

- (18) 『冊府元龜』卷三七・頌徳の項に、「開元二十三年八月癸巳、千秋節、命諸學士及僧道講論三教同異」という記事が見えるが、『大宋僧史略』、『唐會要』、『佛祖統紀』等には、同内容の事實を示す記述は見當たらない。

- (19) 儒佛道三教の談論は、小論の考察する範圍外の問題であるから、ここでは、聖節が佛道二教、或いは三教の間での講論を伴うようになっていったことを指摘するに止める。三教講論については、羅香林「唐代三教講論考」(『東方文化』『Journal of Oriental Studies』) 一一、香港大學東方

文化研究所、一九五四年)に詳しい。

- (20) 山崎宏氏も、「蘇生延壽は他の經についてもみられるが、金剛經において最も著しい。この點、金剛經—續命經は無量壽經と近親になり、中國古來の不老長壽への願望は、執拗にもここに現れているのである」と考察されている。山崎宏・前掲論文。

- (21) 『勅修百丈清規』については、成河峰雄「禪宗の清規—元代『勅修百丈清規』を手掛かりに—」(新保哲編『世界の諸宗教』pp.193-211 晃洋書房、一九九二年)がある。

- (22) 那波利貞氏は、國忌の法會に關しては、唐代においても、『勅修百丈清規』卷一・報恩章・國忌の條に記載されているのとはば同様の形式で儀式が營まれていたであろうと、推察されている。那波利貞『唐代社會文化史研究』(創文社、一九七四年) pp.33-48 参照。

- (23) 成河峰雄氏は、『勅修百丈清規』中に見える「古規」という語が、必ずしも「百丈古清規」を指しているとは限らないと指摘されている。成河峰雄・前掲論文。

- (24) 初崎正純氏は、「以上、六種の陀羅尼〔i・金剛壽命陀羅尼、ii・延命陀羅尼、iii・加持護念陀羅尼、iv・除夭命陀羅尼、v・除死怖陀羅尼、vi・除非命陀羅尼〕に金剛壽命、延命等の如き名を附したのは不空〔七〇五—七七四〕譯の經典によるもので、他の譯經にはない。更に不空譯に限り、前掲の第一咒の終りに 'oṃ vajrāyuse svāhā [唵囉日囉論囉

玄宗朝における『金剛經』信仰と延命祈願(高橋)

娑嚩賀、オーム、金剛の壽命を持てる尊よ、スヴァーハー)なる神咒がある」と指摘されている。(一)内は、筆者が補った。初崎正純「延命法に關する佛教經典の研究」(『印佛研』一五一—、一九六六年)。また、『佛教大辭彙』卷二・金剛無量壽佛の項にも、「佛說一切如來金剛壽命陀羅尼經あり、不空三藏の譯せし所、今金剛の二字を蒙らしむるは或は之に依れるものなるべし」と附言してある。「金剛無量壽」という語について検討する際、併せ考える必要がある。

- (25) 鏡島元隆「百丈古清規變化過程の一考察」(駒澤大學佛教學部研究紀要)二五、一九六七年) 参照。

- (26) 『御注金剛經』は房山石經中に收められているが、吳夢麟氏の「房山石經本〓唐玄宗注金剛經〓録文—附整理后記」(『世界宗教研究』一九八二年第二期)が發表され、全文が移録された。吳氏により經文、注文に標點が施され、詳細な整理後記が附されている。

- (27) 『釋氏稽古略』卷三は、「開元十九年、御注金剛經頒行天下」(大正藏四九、八二五c)としている。吳夢麟氏は『御注金剛經』の題記の記述を根據に、開元二十三年六月三日以前に、既に『御注』は完成していたと考察される。吳夢麟・前掲論文、及び手島一眞「玄宗の三教齊一志向について」(『立正大學・東洋史論集』四、一九九一年) 参照。

- (28) ここでは四庫全書本から引用したが、清・徐松の『唐兩京城坊考』卷三・安寧坊の項に據れば、「唐興寺」は、或いは

「興唐寺」の誤りかと思われる。

- (29) 『舊唐書』卷八・玄宗本紀上・開元十年の條に「六月辛丑、上訓註孝經、頒于天下」とある。

- (30) 『御注道德經』完成の年代については、道端良秀「唐朝に於ける道教對策」(『支那佛敎史學』四一二、一九四〇年)、藤善眞澄「官吏登用における道學とその意義」(『史林』五一—六、一九六八年)、今枝二郎「玄宗の宗教政策」(『川崎大師敎學研究所紀要』三、佛敎文化論集、一九八一年)、手島一眞・前掲論文等參照。

- (31) 藤井清「唐の玄宗朝に於ける佛敎政策」(『福井大學學藝學部紀要』一、一九五二年)、竹島淳夫「唐朝玄宗の宗教觀と開元の佛敎政策」(『佛敎大學研究紀要』五三、一九六九年)、滋野井恬「唐朝の宗教政策」(同著・前掲書p. 3—23)、吳夢麟・前掲論文、手島一眞・前掲論文。

- (32) 『全唐文』卷二八九「賀御註金剛經狀」。

- (33) 今枝二郎・前掲論文參照。

- (34) 『金剛般若集驗記』については、吳光燦・前掲論文に詳しい。

- (35) 拙稿・前掲論文。

- (36) 盧景裕説話については、牧田諦亮「高王觀世音經の成立——北朝佛敎の一斷面——」(『佛敎史學』二二三、一九六六年)に詳しい。

- (37) 勝村哲也「六朝隋唐の稗史・小説の整理に關する覺書」

- (38) 『惠谷先生古稀記念・淨土敎の思想と文化』pp.1067—1108  
一九七二年)參照。  
拙稿・前掲論文。